

大賞

印象を築く仕事、ビルメンテナンス

岡部 達美

(高校3年生・東京都)

人は、一度も訪れたことのない会社や学校に入った時、一番最初に、何をするでしょうか。皆、決まって一様に見まわす。そして、印象を持つ。いわゆる、ファースト・インプレッションです。

「窓が大きいな。」

「受付の人の印象がいいな。」

「少し、雑然としているようだ。」

すると、案内の人が来て、応接室等に通されます。その折も、人は室内に目を凝らし、そして、また、印象を刻みます。

この繰り返し、日常の生活であると、私は考えます。一期一会の継続とファースト・インプレッションの循環が。

私の家には、毎日、客人があります。父の仕事の関係で、相談者が続くのです。

「どうされました。」

「実は、息子が友だちに怪我を負わせてしまって。」

父のところには、かなり込み入った話や煩雑な話が多く集まります。しかし、父は、それらを煩わしいとは一切思わず、真剣に耳を傾けています。そして、いつも、決まって、相談者に言うのです。

「お子さん、辛かったですよね。これから、少し時間をいただけますか。お子さんと話したいのです。」

父は、大学教授をやめて以来、毎日、教育相談をしています。しかし、法律家と違って、父の解答には、正答

がありません。父は敢えて、結論を出さないのです。

「それで、君は、怒ったのか。」

「はい、最初は我慢していたけど。あまりに生意気だったので、懲らしめてやったんです。」

「そして、相手から訴えられたと言う訳か。」

「俺、殴ったのは悪いと思うけど。あいつは、殴られて当然だと思うんだ。」

「殴られて当然か。」

そのうち、相談者は、こう言うのです。

「少しやり過ぎたかな。謝ろうかな。」

父は、すぐ応えません。しばらくして応えます。

「謝っちゃ、だめだ。」

「なぜ。」

「その前に、話すんだよ。相手と。そして、また、思い切りぶつかればいいさ。」

少年の顔に明るさが戻って来たところで、父は、相談を終了します。

一般の住まいを相談所にして、早20年。17歳の私には、父の苦勞も喜びも、すぐさまわかるほど、心に余裕はありません。しかし、たったひとつですが、父に協力してことがあります。それは、相談室とトイレの掃除をすることです。

8畳一間の相談室には、大きなソファと、生徒用のテーブル、そして、父の机があります。周りは、低い本棚に囲まれ、地デジ対応から遅れて寂しそうにしている

アナログ・テレビと、かなり音質のよいアンプがあります。

私は、小学5年生の時から、気が向くと、そこの掃除をしていました。父が疲れて倒れてしまった時から。その時、父は、知的障害のある生徒の受験指導をしていました。なかなか根気のいる指導だったようですが、彼は、すごく伸びており、自信すら顔に浮かべていました。しかし、父には重過ぎる責務だったようで、過労でダウンし、久しく動けなくなりました。顔面麻痺と手足の痺れ、そして、痛みが続きました。それから1か月入院し、父は、戻って来ました。そして、開口一番。「さて、指導を始めるか。」

当時の私は、父には、もう少し休んでもらいたかった。でも、父には、相談者のことしか、頭になかったのです。「少しでも、お父さんのためにならなければいけないわ。痛くても我慢して教えようとしているのだから。」

私は、気づきました。
「気持ちよく、お仕事をしてもらおう。」

私は、この時、決めたのです。
「毎日、何人もが訪れる相談室と、相談者のほとんどが使うトイレを掃除しよう。」

あれから7年、私は、毎日、掃除を続けています。最近は、歌いながら掃除をするようになりました。「でもトイレ掃除だけ苦手な私に、おばあちゃんがこう言った。トイレには、それはそれは綺麗な女神様がいるんやで。だから毎日、綺麗にしたら、女神様みたいに別嬪さんになれるんやで。」

昨年流行した、植村花菜さんの「トイレの神様」の一節です。私は、この歌が大好きで、毎日大きな声で歌いながら、掃除をしています。私の内緒の夢。それは、植村さんと同じ。
「気立ての良いお嫁さんになるのが夢だった私は、今日も一人でトイレをピカピカにする。」

歌いながら掃除をしている私は、最近、あることに気づきました。一般の民家にも、多くの人を訪ねます。いろいろな話を持って、さまざまな心を持って訪ねます。それを、最初に迎えるのは、その家の人と考えて、私は間違いに気づきました。最初に迎えるのは、門であり、庭なのです。そして、玄関に入ると、床や壁、天井、そして、廊下やドア、障子、窓ガラスが目飛び込んで来ます。そんな時、散らかっていたり汚れていたりすると、客人は落ち着かなくなります。迎える側は尚更です。だから、家を綺麗にすることは、人づきあいの根本だと気づきました。

それが、大きなビルになり、学校になり、公共施設になると、建物や環境を綺麗に保つことは、イメージの良し悪しに直結し、とりわけ、一度悪く映った印象は、訪ねる人の数の増加に伴い、増幅されてしまうのです。そして、一度つくられた負のイメージは、なかなか拭い去ることができません。建物や環境には、そのような怖さや危うさが内包されているのです。

父は、よく、講演を頼まれます。そのような時、父は訪問先に着くと、すぐすることが2つあります。ひとつは、各階のトイレを見て回る。そして、もうひとつが、掃除専門の方の待合所を訪ねることなのです。「受付の人は、綺麗だったけど、トイレは、汚れているな。廊下に物も多いし、窓が汚れている。」

父について行くと、私は、父が、クレマーのように思えて来ることさえ、あります。あまりに口うるさいからです。
「お父さん、どうして、よその会社なのに、そんなにむきになるの。」

「この会社が、世界中に製品を売っているからだよ。会社は製品さえ売ればよいのではない。イメージも売らなければならないんだ。イメージが崩れたら大変だ。清潔で、人に優しい会社というイメージが大切なんだよ。そ

れには、まず、建物。その中でも一番大事なものは、人が最も利用するトイレだよ。」

ビルメンテナンスの仕事は、ビルで働く人やビルを利用する人が、安心して気持ちよく過ごせるよう、さまざまな支えをする仕事だと考えます。掃除・衛生管理は勿論のこと、冷暖房設備の運転・管理、空気や水の浄化設備、エレベータ等の管理・保守、警備・防犯、そして、昨今特に注目される防災等、多岐にわたっています。

私は、先日、長くビル管理をして来られた方の話を伺いました。そして、驚きました。

「管理人の仕事はね、ビルを管理するだけじゃないんだ。地球に関係する仕事なんだよ。」

「地球に関係するって、どういうことですか。」

「ビルを無理なく大事に使えば、長持ちするだろう。つまり、冷暖房や除湿などを上手に使えば、ビルは、無理なく長く生きられる。そして、そうすることが、実は、電気量にも水道量にも跳ね返り、それらのエネルギーを効率よく使うことは、ひいては、地球環境を守ることにもつながっているんだよ。」

私は感動しました。ビルメンテナンスに携わる方々の仕事に対する誇りと高い意識の存在に。だから、日本中の多くのビルは、綺麗で心地よいのだと改めて実感しました。

また、私自身も、日々、相談室やトイレを掃除していて、驚くような印象を、掃除に持つようになりました。それは、綺麗になっていくのは、部屋ばかりではない。それよりむしろ、自分の心が磨かれ、人のためになることを考えるようにもなっているということです。そして、人のためになるよう心がけると、不思議なことに、自身の心が元気になっていく。うれしくなり、幸せに思えるようになっていくのでした。つまり、掃除が、人のためではなく、自分のためになっていると、最近感じるのです。

そして、さらに、掃除以外に、人のためになることを

探し実行するようになりました。実は、私の街は、独居老人が溢れています。認知症の方もいます。そこで、私は、彼らの話し相手になったり、昔の話を聞き書きさせてもらったりしています。皆さん、喜んで協力して下さります。掃除は、街の人をつなぐことにも通じていると、実感しています。

そして、これらの掃除に対する私の印象の変化が、実は、ビルメンテナンスについても言えることに、最近気づきました。掃除・衛生管理、設備の管理・保守、警備・防犯、そして、防災と、ビルメンテナンスの仕事は広範囲です。しかし、一番の仕事は、そのビルが安全であり綺麗であるという、かけがえのない価値を生み出しているということなのです。初めて訪れた人にも、毎日通う人にも、ビルに入った途端に、安心と清潔感を与える仕事。綺麗だと言う印象をしっかりと築く働きこそ、ビルメンテナンスの仕事だと確信しました。

「トイレの神様」の歌は、こう終わります。

「おばあちゃん、おばあちゃん、ありがとう。おばあちゃん、ほんまにありがとう。」

私は思いました。いつも綺麗な環境にしてくれているビルメンテナンスに携わる方々に、このことばを贈りたい。そして、もうひとつ思いました。トイレがあるからこそ、快い生活が送れるのだと。だからこそ、トイレにも感謝しなくてはいけない。さらには、私たちの安全を保持してくれているビルや家々にも感謝しなくてはならないと。

だから、私は、感謝しながら掃除をするのです。

「ありがとう。綺麗。ありがとう。わが街。」

そして、ビルや公共施設を訪れた時、心に浮かべるのです。

「今日も、ビルメン、お疲れ様です。いつも、ほんとうにありがとうございます。」

(おわり)